

芦屋・親王寺で活躍した深江の大工

神戸大学大学院人文学研究科
地域連携センター非常勤講師

室山京子
館長 大国正美

はじめに

江戸時代、深江村には有力な大工集団がいて近隣の普請を請け負っていたことが知られている。その活動は断片的にしか分からぬが、嘉永七年（一八五四）森村の四郎左衛門が居宅普請をした際に、普請を請け負ったのは深江の九郎兵衛であった（『本庄村史』歴史編）。近代では納多惣太郎などの活動が知られる（旧三条村共有文書）。

このたび、芦屋の親王寺の資料調査で、元禄三年（一六九〇）に「磯邊次郎左衛門尉信近」という大工名が記された棟札が見つかった（写真、解説）。親王寺は承知十一年（八四四）阿保親王の別邸に、持仏の阿弥陀如来を本尊にして建てられた阿保親王の菩提寺という伝承を持つ。阿保親王の末裔とする長州藩毛利家は、参勤交代では親王寺に立ち寄り、しばしば宝物を寄贈した。

棟札表面に元禄三年（一六九〇）六月の年代と当時の第十二世住職

眞誉上人秀廓和尚の名が記載され、裏面には「深江村藤原御番匠 磯

【表面】

神力演大光

当善長

調査の経緯

二〇一六年から二年にわたり芦屋市打出町にある浄土宗阿保山親王寺の所蔵資料が調査された。その担い手は歴史資料ネットワーク（史料ネット）を中心とする各地から集まつたボランティアである。一九九三年に新築された同寺の本堂は一九九五年の阪神・淡路大震災で全壊、二〇一一年一月に再建された。その間に住職の交代も重なり所蔵資料の整理にまで手が及ばない事情があった。ある檀家が「芦屋古文書に親しむ会」を主催する知人に相談したところ史料ネッ

【裏面】

深江村藤原御番匠

磯邊次郎左衛門尉信近

今福村川嶋兵衛尉



ト関係者を紹介され、親王寺と檀家の協力のもと史料ネット主催での調査の実施が決まった。資料内容は古文書（約三六〇点・近代中心）や古典籍、屏風、軸物、棟札など。まず古文書・古典籍の調査を史料ネットと前掲「親しむ会」メンバーで行い、その後ボランティアを募って専門家の指導のもと屏風の解体と下張り文書剥離作業を進めた。

下張り文書調査と並行して行った軸物調査は、『芦屋市史』に紹介された以外のものを中心に美術史研究者らが担当した。剥離やカビによる汚損などが見られたが、古文書が少ない状況にあるなかで軸物は歴史資料として貴重なものと言える。近世後期に全国各地で活躍し、住吉村の赤塚山に一時期滞在した徳本行者と親王寺との関係を示す軸物が確認されたことはその一例である。なお、一〇一八年一月には下張り文書および軸物調査について報告会と展示会を行い、軸物調査報告書を一五部作成し寺に納めた。報告書に収録した軸物および関連資料は約九〇点である（報告書等の閲覧は親王寺に問い合わせが必要）。

（この項、文責・室山）。

江戸幕府の大工支配と深江の大工組

大工は近世初頭には城を構築するのに欠かせず、その統括は軍事的に重要だった。このため徳川家康は中井正清を大工頭に任じ、一〇〇〇石の知行を与え、近畿の摂津・河内・和泉・山城・大和の五畿内と近江の六ヵ国の大工を統括させた。中井家は代々大工頭として、江戸幕府が主導する普請や禁裏御用には大工役を賦課して大工を動員した。大工役とはもとは織田・豊臣政権が、職人を編成していくために身分に応じて負担させた役の系譜を引くものである。

中井氏のもとに統括された摂津の大工組織として、近世初頭は大坂市中を除いた在方に熊内村（神戸市）の仁左衛門組と島下郡福井村（茨木市）の吉左衛門組があった。仁左衛門組は深江を含む菟原・武庫・有馬・八部、すなわち概ね武庫川以西の村々の大工を統括していた。

やがて一七世紀末には昆陽村（伊丹市）の次郎右衛門を組頭とする昆陽（小屋）組が生まれ、三組体制となつた。仁左衛門組・吉左衛門組は次第に分裂し、安政四年（一八五五）に御所の内裏を造営したときは、福井村の吉左衛門系一〇組、熊内村の仁左衛門系が有馬郡域の攝州三組・兵庫四組の計七組に分かれ、大坂二四組と大坂天満組七組を合わせて四八組になつていた。

正徳元年（一七一二）の尼崎藩領の「摂津国八部郡菟原郡武庫郡河辺郡村々役高引帳」（『本庄村史 史料編』第一巻）によれば、いわゆる西摂の尼崎藩領で大工の役を負担していたのは、兵庫津・走水・深江（以上、神戸市）・西宮町（西宮市）・鴻池・荻野・荒牧（以上、伊丹市）・西川・今福（以上、尼崎市）の各町村だった。

深江の大工組織の変遷は定かではないが、熊内村の仁左衛門組に所属したのち、嘉永七年（一八五四）森村の四郎左衛門が居宅普請をした際には、小浜組（宝塚市）に所属していた。

深江村の大工高

深江村の大工の役負担の基準となる大工高は三三石だった。大工高はかつて大工が所有していた田畠の石高で、田畠から取れる農作物には年貢が掛つたが、百姓に掛けられる百姓夫役が大工の所持する田畠には免除され、百姓夫役の代わり大工として動員された。享和三年（一八〇三）は大工高二七石四斗三升二合に対して九割の年貢がかかり二四石六斗四升九合の米を収めた（『本庄村史 史料編』第一巻）。村の平均の年貢率七八%にくらべて高く、大工稼ぎがあるから可能だったのだろう。

いったん決まつた大工高は大工稼業をやめても継続した（『伊丹市史』第二巻）。文化七年（一八一〇）の調査では深江村で大工高を所有するのは七人で、一人四石五斗七升二合ずつを均等に所持していた。この合計は三三石となるので、正徳年間と変化がないことが判明する。

享和三年の大工高が二七石あまりになっているのは、大工高が減ったのではなく、大工高の田畠のうち四石余りが不作で年貢が免除されたという意味だろう。

磯邊次郎左衛門の系譜

松田直一氏が本庄村史編纂のために筆写した『本庄村誌資料』第三巻に、大工役人九郎左衛門、作左衛門、治郎左衛門三家の家族改めがある。出典は不明で何かの史料から大工役人の家族だけを抜き書きしたらしい。この史料を使って次郎左衛門家のその後を追ってみたい。

『本庄村誌資料』収録の家族改めに治郎左衛門が初出るのは元文五年（一七四〇）で六六歳。元禄三年の親王寺棟札が書かれたときは一六歳で、磯邊次郎左衛門尉信近の子か孫だろう。妻は先代九郎兵衛の娘だが、九郎兵衛も冒頭述べたように大工だった。大工役人の作左衛門も先代九郎兵衛の娘を嫁にもらっているので、同業者が婚姻関係でも結ばれていたことが判明する。

治郎左衛門は七二歳の寛保四年（一七四四）まで大工役人を務め、寛延三年（一七五〇）には治郎左衛門は三九歳で登場、隠居の父教通は七七歳なので、治郎左衛門は子に譲って教通と名乗っていることがわかる。宝暦三年（一七五三）・同四年には善太郎として登場している。しかし善太郎の年齢は四二歳と四三歳で、長男助松、次男弥三郎、長女さきの家族名も一致するので、寛延三年の治郎左衛門が改名したこととは疑いない。助松は宝暦四年段階で一六歳だった。

そこから記録は三八年間空白で、次に登場するのは寛政四年（一七九二）。治郎左衛門五四歳で、代替わりをしている。この年齢は宝暦四年に一六歳だった助松の年齢と同じであり、助松が襲名したのだろう。それを裏付けるのは、宝暦四年に助松の母は三七歳で、寛政四年には七四歳になっているが、治郎左衛門母・妙西七四歳として記載されているからである。さらに寛政四年時の治郎左衛門の長男は米

蔵一五歳。次の寛政十年は家族構成に変化がないが、その次の文化十二年（一八一五）になると、治郎左衛門は三八歳になつておらず、寛政十二年の米蔵の年齢と一致する。何より寛政十二年の米蔵の母とめが、文化十二年の治郎左衛門の母とめとして登場しているので、米蔵が襲名していることがはつきりする。記録は文政七年（一八二四）を最後に途切れている。

以上、まとめると元禄三年の次郎左衛門尉信近の子か孫が元文五年（一七四〇）当時の治郎左衛門と思われ、以後善太郎・助松・米蔵と、それぞれ嫡男が後を継ぎ、いずれも治郎左衛門を名乗った。家族は夫婦を中心とした単婚小家族で、時に父母を隠居扱いで同居したり弟を同居させたりすることもあったが、弟が家族改めに登場するのは寛政四年と十年だけで、例外的だったようだ。大工職人は婚姻関係で結びつきを強くしていた。

おわりに

江戸時代に深江にとって重要な大工の家柄は近代にはどうなったのかは不明である。共同墓地の深江ブロックには磯邊家の家が三家ある。このうち大日神社奉賛会の会長を務め深江財産区の理事も務めた磯邊信三氏の父為次郎は昔船大工だったという（磯邊譲氏による）。しかし治郎左衛門とのつながりは不明である。

ほかに磯邊家の墓が二ヵ所あり、昭和三十六年に磯邊治郎吉が再建した「磯邊家歴代之墓」が現存するが、もとは「文化十五年 磯邊五郎左衛門」と側面に掘られている。ただ再建された墓なので本当に五郎左衛門だったのか。治郎左衛門を読み誤ったのではないか？など想像が膨らむが事実の壁は厚い。改めて江戸時代は遠い過去になりつあることを実感する。

（以上、文責・大国）